

## 「詩画展」が開催された

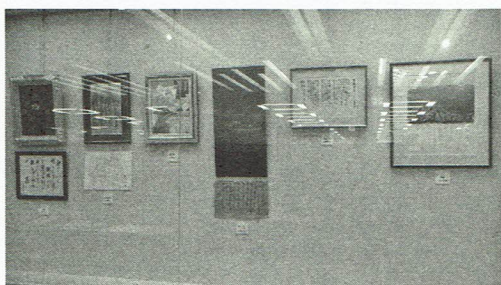
詩画展担当 近藤摩耶

第26回詩画展が、去る7月7日から7月19日まで大阪市立中央図書館にて開催されました。今年には「多彩な詩とコラボするアート」として、31名の参加は昨年とほぼ同じで、展示場所もエントランスギャラリーのガラス扉3か所と壁4か所及びガラスショーケースで、例年通りでした。

縦横90センチ以内という大きさは守られていたが、詩と画の別付けを出来るだけ少なくという大枠の規定は守られず、さらに詩と画の一体となったものは、読めないぐらいの小さい作品が多く、その傾向は昨年より増えていました。

昨年始めた「作品集」というカラー冊子を作るには、この小さい字をすべて拡大画像にしなければならず、今後皆様のご協力を期待致します。この「作品集」は関西詩人協会ホームページの「会員の活躍」で閲覧できます。

感想を書いて頂くノート2冊にはよく書き込まれていて、「力作だ、ユニークな文芸活動だ、絵も詩も充実し年々良くなっていく、暑さを忘れ見とれてしまった」という感動の声が多く寄せられました。



## イベント2017の報告

イベント担当 榎次郎

9月9日、ドーンセンターで、総勢81名の参加者(会員41名、一般40名)という予想を超えた盛況の中で行われました。

第一部、寮美千子さんの講演、「詩が開いた心の扉」に寄せられたアンケートでは「受刑者の心が開き、言葉によって自らの心を知り、周りの人々との交流していく姿が浮かんできました。とても感動しました」「自己表現を通じて、本来の自分に還っていく、という話が、とても印象的でした」「知らない世界のことが、パワフルなお話で涙が出る場面も。ボランティア活動の勉強になりました」「今までにも三回聴きましたが、三回涙しました。私も障害のある子どもたちを支援する仕事をしていて人は変わることができるということに感動しました」「少年受刑者との会話ひとつ、ひとつ全てに印象が残る、深い悲しみや後悔や自分への想いが伝わって来ました」「詩のことは人が人の心を癒してくれること。子どもたちを見つめる私たちおとなの責任を思いました」「少年刑務所の子どもたちとはどんな子どもなんだろうと思っていました。やはり、愛に飢えていた子どもたちだったんですね。寮さんとの縁で、変わっていく様子、素晴らしい。この子どもたちの人生に幸あれと願わずには居られません」等々心を揺さぶられた感想文が多く、講演中、目頭を押さえている方が何人もいた。詩を書くことを通じて、硬く閉ざされた心の扉が開かれていく。詩が本来持っている力に改めて気づいたお話でした。



最後に、人は話し合うことよってのみ、理解が深まることを、北朝鮮を巡る現状にもあてはまることを示唆していた。

第二部、「朗読文化の会・あい」の朗読では「くも・空が青いから白をえらんだのです。たった一行に込められた想いが伝わってきました」「どの詩も心に響きました」「どれも胸に残りました」「とても上手な朗読でした」等々に感想が寄せられています。第三部、音登夢さん夫婦の演奏については「なつかしいコンチネンタルタンゴをありがとう」「どれも素晴らしいかったです。コンチネンタルとアルゼンチンタンゴ、違いますね。私はアルゼンチンタンゴが好きです」「どの曲も昔からよく知っている曲目で楽しめました」と感想が寄せられています。第四部 会員による五行詩にも心に残った作品への投票が集まりました。投票の多かった作品については、総会の折に発表します。

総じて今回のイベントは、参加者の皆さんに詩の持つ力について、改めて感じ取って頂けた内容でした。来年度はこれに勝るイベントに期待して頂けるよう努力していきたく思います。協力いただきありがとうございました。運営委員の皆様、会場へおいで下さった皆さまに感謝申し上げます。



終了後関係者。一列目右が寮さん  
二列右から二人目と三列右が音登夢さん